
神殺しの行く末

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殺しの行く末

【Nコード】

N4563L

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

色々と世界を旅している内に、不本意だがアホ神と闘い殺してしまい、実に嫌な称号を手に入れてしまった青年。幾たびの戦場を超え、《調律者》として幾度の世界に名を馳せてきた青年。そんな最強物語の一つ。なお主人公は『時間制御』を使います。最強ものが好きな私ですが、今後ともよろしく願います。

突然の出会い！正直めんどくさい……（前書き）

話が飛んでしまってますが、どうぞお願いします

突然の出会い！正直めんどくさい……

「よう、久しいな流星」

「遠夜、お前とはあまり戦いたくないんだなあ〜これが…」

「無駄口叩いてられる分余裕だろ……」

「全くだ……」

「とりあえず、一度は死んどけ。めんどいからな」

遠夜の左手から剣が出現した。それを見た流星は片手を空に掲げ……。

「テメエが本気なら手加減してやらないからな、覚悟しとけ！」

それを聞いた遠夜はさらに闘気が増し、空気が崩れる。

「まあ、まあ。短気だと視野が狭まるぜ」

流星はうつすら笑いして遠夜に警告した

「テメエをノスのは簡単な事だとは思ってねえ……。だがな……」

遠夜は流星を睨みつけながら叫んだ

「テメエを殺す!!!」

流星は動揺することなく遠夜に言い返した。

「ああ……。やってみろ!!」

風が止まり、刹那沈黙がこだまする。

遠夜は流星との距離を詰めるべく、前に足を踏み出そうとした瞬間、既に流星は刀をスライドさせ、遠夜の首目掛けて刀が襲い掛かる。

「……ちっ…!!」

遠夜は、それをすれすれでかわし、回し蹴りをかました。

しかし、流星には当たらず、回し蹴りは空を切った。

「……ちっ!」

遠夜は舌打ちし、落ち着いた物腰で。

「ったあく……、テメエはゴキブリカツてか!」

「酷いな、俺は人間だって」

「普通の人間はこんな人外な動きはしねえ。」

「ただの人間だぞ、これでも。」

「ふっ!神と渡り合える程の奴は居るかも知れないが、神を殺しきつた奴はテメエが初めてだ。そんな奴は人であるハズがない」

「ああ、あの馬鹿神か……。あいつは対したこと無かった」

遠夜は舌打ちをしてウンザリといった感じで

「もう、これ以上聞いても意味なさそうだ……。首だけ刈って吐かせてやるよ!!」

「全く……。これだから【闘神】は嫌いだ、いつも闘い闘いつて、ウザくて、聞き分け無いし殺し切れないし」

双方の魔力が爆発的に膨れ上がっていく。それはまるで互いに力の確認をしている様に見える。

「チリも残らず消滅させてやる」

「お前は、寝てる」

互いの魔力が衝突しあう

遠夜からは左の手から魔力で固めた刃がでてくる。あまりにも高い純粋な魔力の塊のせいか大気が震え、『世界』自体に干渉してしまう。

それに対し流星は背後に何やら不思議な魔法陣を作りあげていく。魔法陣には激しい雷鳴が轟き、『世界』に干渉する。

互いに必殺、受ければただではすまない。

「《レスト・バイト》!!」

遠夜の咆哮。

「《インフィニティ・ライティング》！！」

流星の咆哮。

遠夜は流星に向かってただ純粹に突っこんで行く。

流星は魔法陣を完成させ、両手で何かを包み込む、手の平に魔力を溜め込み、そして貯めた魔力は爆発的に増え、球体へ変化を遂げる。

そして衝突。

戦果は、どちらも疲れたであった。二人とも外傷はなく疲れただけの様だ。

「テメエ……。メンドすぎだ……」

「嫌だなあ。これでも心はピュアだけ。さすが遠夜だな。お前本気出してないだろう?」

「当たり前だ、この姿してるあたりで制限掛かってんだよ!」

二人はそして別れた。

FIN

この物語はかれこれ昔の出来事である。

「さて、物語を始めよう。異端も虚像を混ざり込んで、亡くしたものを語り尽くそう。なあ、流星」

突然の出会い！正直めんどくさい……（後書き）

続いてがんばります！！

親切が突然……、コイツ狸か！！（前書き）

文のあたりをがんばって長くしてみました^^

親切が突然……、コイツ狸か!!

流星は遠夜との戦いの果て、大量の魔力を消費をしてしまい。本来の力を出せないため、魔力の回復のできる、静かな町で、現在暮らしている。

「しかし、こここの小屋、安いからって、借りたの失敗したかな？」

などと考えていると
トントン

ドアのノック音が入口付近から聞こえてきた。誰もこの事を知らないのに誰か来るとは。とりあえず対応は取っておこう。

「は〜い、待ってくれ」

扉を開けてみたもののそこには誰も居なかった。

「はて？誰かが尋ねてきたかと思ったのだが気のせいかな？」

ドアから顔を出し廊下に出てみるものそこには誰も居なく、ただそこには広い廊下があるだけだ。

「キユウ〜」

下から異様な声と共に俺に向かって飛び掛かってきた。

「うお!?!」

一瞬驚いたものの、よく見ると中々可愛い何かだ……。

「キユウ〜!!」

なんか唸ってらっしゃる。

『私の声が聞こえますか?』

どことなく聞こえてくるがたぶん【こいつ】からだと思っ。

「ああ〜聞こえてるぞ」

『あまり驚かないんですね……。』

「大して俺は驚いてないが、逆にお前を驚かせているみたいだな」

別に喋る動物と話すなんて初めてではないのだ、俺は色々と体験済みでな……。

『驚かないなんて……。貴方の人生に何があつたか聞きたいものです……。そんな貴方に頼みたい事があります』

そう言うと俺の肩から飛び降り距離を離し真剣な面持ちで淡々と語りだす。

『私の名前はアリア＝フォードと申します。以後お見知りおきを。貴方の名は?』

「別に名前なんて教え合う必要ないだろう。お前の面倒事なんて端から聞く気ないし、所詮は他人事だ、一々構ってやる気はしない」
自分で言うのも気が引けるが、たかが他人事だ別段なにも関係しない事だし、世界に影響を与えなければ別にどうでもいいや。

『名前は別ですよ』などと呑気に言うものだから、つつい……。

「俺の名は八神流星だ。これで良いか？」

『はい、分かりました流星さん』

いきなり名前を呼ぶかコイツは……

はあく。最初から予想ついていたが、こりゃめんどい事に関わってるな。

『で、ですね……』

アリアは言いづらそうな感じで言葉を紡いだ。

『どうか、私を助けてください』

ぐう！そんな小動物みたいな目で俺を見ないで、せつかく今回は頑張ってるんだから。

「助けてやる分にはあまら問題無いが、しかしながら俺に利益が無い。ギブアンドテイクは基本だろ、それ相当を要求させてもらう」

などと言ったものの何もいらぬのだがな。

『え！？助けて下さるのですか？』

などとアリアは驚いていた。まあ、さっきとは言ってる事全然違っ
しな。俺。

「さっきも言ったがお前からそれ相当なものを貰っていくつもりだ。
あ、そうそう俺を金で済ませようとしても無駄だから。結構ハンギリ
ーなのよ俺」

とニコニコ笑いしながら俺は

「それで良いならどうぞ」

『うう〜！何か後で多額な借金を背負いそうです！嫌な予感たっぷ
り……』

本当に面白いなコイツ

「まあ、冗談はさておき。一様手助けぐらいはやってやる」

「ありがとうございます！」

そう言うとアリアは俺の肩に再度乗り、道案内をし始めた。

「そしてここがお前に呪いを掛けた奴のアジトなのな……」

見ればそれは不気味なオーラを放っている洋館である。

「悪趣味な……。帰って良いか？」

『駄目に決まってるじゃないですか』

ニコニコ微笑みながら、きっぱり言ってきた。

中に入るとそこは一般で言うダンジョン構造になっていた。

「屋敷の構造がネタとしか思えないな、主の頭大丈夫か？」

『それよりも先に進みましょうよ』

アリアが俺を急かしてきた。

『ここがそうですかね？』

色々と道中の過程を飛ばしているが、まあ良しとしよう。

「我が玉座になにようだ……」

低い声が周りに響き渡り、そこには二十歳程の青年が立っていた。

何か凄い事言ってた気がするんだが……。

「何か突っ込みどこ多いな」

『って！そんな事言ってる場合じゃないですよ！』

アリアが慌てた様子で俺に言ってきた。……でも耳元で大声を出すのは自重してもらおうと助かる……。

「アイツそんなに凄い奴なのか？」

黒髪の奴から感じる威圧感、確かに人外じみた物を感じるが《アイツ》程の闘気は感じられない。

『知らないわけじゃないですよね？』

スイマセン分かりません。

でも、ただ一つすることが出来てしまった。（突発的な気分によって）

「とりあえず、黒髪は殴り倒してから帰るとするわ」

それにはアリアも驚愕な顔をした（小動物なので顔がおかしいことになっている）

『何言ってるんですか！！そんなの………』

ああ、さっきから本当うるさい。俺がキレる30秒前だぞ、少しは自重しろコンヤロ。

「ああ。うるさい。俺があんなのに負けるわけ無いだろ、お前はもう少しパートナーを信頼しろよ……」

『分かりました私は貴方を信じます、だから絶対勝ってくださいね』

そう言うとアリアは俺肩から離れ、遠くから俺が勝つのをただじっ

と見守っている。

「人間……、ママごとは終わったか？我に勝つとは笑止……。その行い万死に値する」

黒髪は手の平全てに魔法陣を展開し、そしてそれを全て握り潰した。

「《自然結晶・闇》（ダークネス・バイタリオン）」

黒髪の背後から強大な魔法陣が出現。

「…死ぬ…」

魔法陣から大量の黒い光りの球が湧きだし、その黒光球は俺に向かって殺到してきた。

殺到してくる黒光球はざっと数えて、だいたい68ぐらい。回避無理だろこれ。

俺は直撃する軌道の黒光球のみを見極め、腰の右側にある刀を抜き黒光球を弾いていく。

その動作は無駄が無く、ある一種の芸術を醸しだしていた。

「まさか、これだけじゃないよな……。なあ、自称副神様」

確かに黒髪はかなり強い部類に入るだろしかし……。

「確かにお前は強いだろう、だが……」

黒光球を弾きながら余裕の笑みで……。

「相手が悪かったな」

流星の姿が一瞬ブレ黒髪の上に立ち、刀を右腰に納めた。
その瞬間黒髪は地面に倒れた。

『え？』

一瞬の出来事に頭がついていけず、アリアはマヌケな声を上げてしまった。

「……何故だ……。何故……。我が人間に……。負けて……。しまったのだ……」

黒髪は未だ意識がある様で、苦悶の声をポツポツと上げている。

「自意識過剰過ぎだぞ自称副神。人間はテメエが計れる程弱くねえ！強いからって調子乗りすぎだ、このドアホ！せいぜい後悔して来世に期待しろ、まあ……。それより強く成れるかは、分からんがな！」

『大丈夫ですか福伸さん！』

アリアなぜ、俺ではなく黒髪を心配するのか、疑問に思うのだが。
何故に？

『死ぬんだつたら、私の呪い解いてから死んでください』

ああ……。そういえば、そんな理由でここまで来たのだった。

「……残念ながら……呪いを解くのは無理だ……。せいぜい……。その姿のまま……。一生……。生きるがいい」

『そんな！』

黒髪は完全に力尽きた様で、身体が足先からどんどん光の粒子に変わっていく、それはとても神秘的な光景であった。

「何で光になって、消えるんだろうな？お決まりのパターンすぎだ、流石は人外」

そんな光景の中、アリアはどこか虚ろな眼差しで空を見ていた。

「まあ……。ドンマイ！」

とりあえず慰めておこうと思い、アリアに声をかけた。

『もう、私は人間に戻れないのでしょうか…？』

うん、かなり重症みたいだ。でもな……。

「アリアは俺が、呪いを解けるって言ったらどうする？」

『え！？出来るんですか！？』

まあ、俺の能力《時間制御》をフルに活用すれば、時間を使った《現象》に関しては干渉できる。

さっきの黒髪野郎の戦いでは、《時間制御》は使わないうで実力でボ

「コしてやったがな。そこまで使う相手でもなかったし、《時間制御》は使わないに越したことはないしな。でもアリアになら使っても良
いかなっと思ひ始めてきた。面白い奴は好きだからな。」

「じゃあ、まずはアリアこっちに来い」

そう言うとアリアはこちらに向かって歩いて（？）来た。

『本当にこの呪い解けるんですか？』

「ここまできて、「出来ません」って言ったらどうする？」

『貴方をブチ殺します…』

怖！！

「さっきのは例えば話だし、実現可能じゃなかったら言わねえよ…。
…では始めるか」

俺はアリアの額（？）に左手を置き、呪いを能力発動前まで《時間
制御》で戻し消してやった。

「お？」

「私…人間に戻ってる！！」

本当ビックリした、突然姿が変わるんだから。

「八神流星さん、本当にありがとうございます…！」

そう言うとアリア（人間）は俺に向かって抱き着いてきた。
抱き着いて来たアリア（人間）の容姿を観察。

身長150〜160？

髪は緑色。

髪型はツインテールでリボンで結ばれている。

瞳の色は赤褐色。クリクリしててカワイイです。

胸はB〜Cカップギリギリといったところか。

顔に関しては美少女である。

スタイルに関してはノーコメントで。

服装はゴスロリです。最高だな。

自分自信の変態ぶりを再確認し終わり、意識は現実へ復帰した。

「あ、ごめんなさい。つつい嬉しくて……」

顔が真っ赤になりながらも俺に対して謝ってくるとは。何か虐めた
くなってきた。

「いやあ〜、こんな美少女に抱き着かれるなんて本望以外のなにも
でもないですよ。ハッハッハ！」

アリアに美人であることを冗談半分&嫌味など、色々と含みがある
ことを言っちゃった。

「美人なんて…。そんな！」

目の前でなんか悶えはじめた様で、俺の話し聞いちゃくれない。

「何か怖いぞアリア……」

「酷い！私はただ喜びを身体全体で現しているだけなのに！」

アリアは怒り、俺に対して何故か、アッパーカットを放った。

「アリア……。人間に戻ったら凶変しやがって！」

何故か俺も、怒りが心の底から込み上げてきた。さっきまでは猫被ってたのかコイツ

「これが本当の私です。呪いのせいで、色々と行動に制限が付いてたんです。」

騙されてたよ！

なんというか、見た目は良いのに、中身が完全崩壊してるよコイツ。

「なら、もう一度動物(?)に戻ってみるか？」

俺がそう言うと、アリアは笑いながら指を向けてながら。

「《デイメンション・ワールド》」

アリアがそう言うと、周りの空間にひびが入り始める。

「これで貴方は、この城から出る事は出来なくなりました」
ここって、ただの怪しい屋敷じゃなかったのか？

「やうに…」

アリアが指を鳴らすと、周りの空間が歪み始めてきた。

「『空間歪曲か』……」

「あら？人間なのに、この魔術を知っているなんて凄いですね」

「昔の連れが、似たようなことしてたからな。それと、さっきのお前言い方だと、お前は人間じゃ無いように聞こえるのだが」

それを聞くとアリアは細く笑った。高らかに叫んだ。

「私の名前はアリア・フォード。古代遺産『カグラ』の艦長であり、天祖様の下僕でもある！」

ハッキリ言っつて、凄く痛い子だなアリア……。

「そんな高らかに下僕宣言されても、反応に困るぞ？」

「天祖様のことも知らないくせに……。私のことは好きに言えば良いじゃないですか！でも貴方には、天祖様の慈悲深いお心なんて？も理解出来ません！」

うわゝ、宗教じみたこと言ってるよ。

「うるさい変態。」

「変態で結構！私は天祖様の為ならどこまでも変態になりましょう！」

なんか、意思是強いんだけど、なんか可哀相になってきた。

「そして流星さん、ここまで聞いたからには貴方を生かして帰すわけにはいけなくなりました」

そっちから、ベラベラと喋ったくせに何を言うか……。

「死んでください」

輝かしい笑顔じゃないか。使い道、違ってるけど。

「残念ながら俺は、死ねなくてな、お前の力で殺せるもんならやってみる」

そう俺が言つと、アリアから今まで以上の殺気が空間を支配する。

「《次元結晶》（ディメンジョン・マジック）」

アリアの周りの空間が完全に割れ、割れた異次元空間から光の粒子が収束し、こちらに向かって飛んできた。

俺はそれをすれすれで避けきる。

「で？終わり？」

念のためにぎりぎりですり抜けたのは、あれにホーミング性があるか調べたためだった。

「そんなわけ、あるわけじゃないですか？」

ドス!!

感覚があったんで、後ろを確かめると、俺の背中には、でかい洋風の剣が刺さっていた。

「転移か？」

後に剣を《転移》させれば、こんな事も出来るだろうしな。背中に刺さっている剣を抜き取ると、刺さっていた所から血がドバドバと流れ始めてきた。

それと同時に、持っていた剣が霧散し、形がなくなっていた。

「なるほど……。」

あの剣からは、膨大な魔力を秘めていることは分かった。

だが、形成魔力が少なすぎる。

膨大な魔力を得る為には、過程にも膨大な魔力を使用する。だが、これにはそれが無い。異常だ。

「まさか異世界魔法を『引っ張って』きてるんじゃないだらいな？」

「人間のくせして、よく私の魔術を見破りましたね。それと……。さっきのは痛感を無くしてるんですか？」

「そんな器用な事、俺が出来るわけないだろ？」

俺は、どこか相手を馬鹿にした態度で言った。

「なんか、凄く私を馬鹿にしたように聞こえるんですけど！」

「馬鹿にしてるからな」

「なっ！！！」

アリアの顔は真っ赤に染まり、切れる一歩手前までできていた。

「消えて無くなれ！！この変態紳士が！！！」

アリアの怒りにより、周りの風景が蜃気楼の如く歪み、新たな世界がこの世界に誕生した。

城はもう見る影も無く、空には無数の星が輝き放っている。

「なるほど……。『固有結界』か……」

アリアの正体は未だ分からないがただ一つだけ解った事がある。

コイツは俺が本気で相手するに相応しいと。ああ……でも、全力は出さないよ。

「ねじろー！」

アリアがそう言うと俺の身体がねじ曲がった。

それも、人間にとっては確実な死に値する程に身体が曲がる。

「《干涉》」

そう俺が言うだけで、曲がっていた身体は元の姿に戻っていた。

「なっ!!!?」

アリアは驚愕な顔をした後、落ち着きを取り戻し俺を凝視した。

「貴方、いったい何したんですか!?!」

「自分で考える。それと……」

俺は笑顔で。

「おめでとつございます。アリアは俺の中で敵と認識されました」

「貴方、今まで本気じゃなかったんですか……?」

「当たり前だ、バロー」

俺は右腰にある『紫電』（つまりさつき使っていた刀である）を再度引き抜きアリアに刃先を向けた。

「全力は出さないが『本気』でやってやるよ」

刹那、殺気が周りに充満し、濃厚な殺し場を作りあげる。

それに気付いたアリアは、真剣な顔をし、警戒をしている。

「貴方の認識改めてなければなりませんね、私も真面目にやらないと、これはきついですし、流星は魔王の福伸を倒したことはありま
すね」

刹那、アリアの視界から俺の姿が消えた。

まあ、純粹にアリアまで跳んだだけで、魔術などの使用はしてない
わけ。

つまり、俺の速さは人間では見ることにすら出来ない、人にとっては
恐ろしい凶器なのだ。

「ッ！！《デイメンション》！！」

空間が歪み、アリアの居る座標が変更された。

アリアが元は居たであろう場所には、流星の『紫電』が振り下ろさ
れていた。

「《テレポート》かよー！」

『空間制御』を持っている時点で《テレポート》のことは予想出来
ていた。

「さっきのは《テレポート》ではなく《転移》ですー！」

さっき俺が言ったことをアリアが訂正してきた。
どっちでも良いじゃねえかよ。

「それだけ元気があんなら続けて行くぞー」

さらに俺はアリアに近づき、当たらない様に力加減しながら『紫電』を振り続けていく。

「歪める現象！防御の輪を！《歪曲の輪》！！」

初めて日本語のスペルを聞いた。

などと感心していたが、さっきの術式のせい、俺の攻撃が全て紙一重でアリアから『避けて』いく。

「これで決めます！《ブレイク・イン・ザ・ワールド》！！」

さらにアリアの『世界』にはころびが発生、『世界』各ヶ所さらに歪みが起き、世界制御そのものが『歪み』制限そのものが解除される。

「特と逝け！！」

さらに増えた歪みから魔法、魔術の反応が複数あった、歪みの中からは『異世界』そのものが現れる。

「GO！！」

『歪み』の中から色々と射出されて行く。

中からは、光線？や武器類？などがあり、色々あって分からないがどれもこの『世界』から作られていないことが分かるほどその射出

物は『異様』なのだ。

「ちよっ！お前少しやりすぎ！」

射出物を切っては弾いて、切っては弾いてを続けていく。

しかし、射出物そのものが音速を超えているものもあり、周りにソニックブームを撒き散らしてながら突っ込んでくる。
激しい攻防中、俺は叫んだ。

「どこからともなく持って来るなよ！」

「仕方ないじゃないですか！こうでもしなと、貴方に当たらないんですよ！！」

「いや、普通に空間を爆発させたり色々方法あるだろうが！それに、ここはお前の『世界』だ！常識ぐらいねじり曲げる！」

こうも言っている間にも、俺はしっかり攻撃を防ぎ、未だ傷らしき傷は付いていない。

「これだけ弾幕を張ってるのに無傷って、どんだけ規格外なんですか！」

アリアに罵倒されながらも、俺は攻撃の出来るタイミングを狙っていた。

しかし、先程からアリアの攻撃は休むこともなく俺に殺到しているので隙らしき隙が見当たらない。

「だが……。相手が悪かったな！」

規格外の力を見せてやる。

俺はアリアの懐までの弾幕を潜り抜けた。
それも一瞬で。

「そんな!！」

『紫電』を最小限の動作で、アリアの首元へスライドさせた。

本来なら《歪曲の輪》で軌道は逸れるのだが、対策はあり既に手はうってある。

俺は《歪曲の輪》に干渉したわずか数秒に、その歪んで攻撃が避ける『現象』を『時間制御』で打ち消した。

つまり、俺の攻撃は見事決まったということだ。

アリアの首に直撃したことにより、首元から嫌な音がした。それと同時に、数メートル先に吹っ飛んでいった。

「安心しろ峰打ちだ」

でも、峰打ちでさっきの音はヤバイ。

迫り来る弾幕はいつの間にか止み、所々に次元の穴が開いていた風

景が元の姿に戻っていく。

「まあ、10点ぐらいだな、戦闘センスは……」

あのアリアの戦い方は、どうも力押しでやってたイメージが強かった。俺的にはだけど。

「お〜い、大丈夫か？」

アリアを小突いても反応なし。

「死んだか？」

俺にとつては、死んでも死ななくっても構わない。

俺もノリノリでアリアと話したが、今は別に何とも思っていない。

「これ、どうするか……？」

とりあえず、アリアの容態を確認した。

「息はしてるし、死んでないことは確かだな。だけど……、首大丈夫か？」

やはり、首目掛けて強くやりすぎたか。でも自業自得だよな、だって仕掛けてきたのあっちだし。

「うう〜〜!」

唸っている程元気があるなら、ほっとおいても良いか。

あ、そうそう動物に戻すの忘れてた。

「《逆行》！！」

そう言うとアリアは人から動物へと姿を変えた。というよりも戻った？

「さて……。動物に戻しておいたし別に害は与えないだろ、放置しておくのも面白いそうだが、どうするか……」

しばし思考し、俺は一つの結論に到った。

「やっぱり、放置で……」

しばし考えたが、保護はやっぱり面倒臭いし考え無しにはちょっと無理だろ。

「帰るか……」

帰る場所はないが、こんな薄気味悪い場所に居るより何100倍もましだと思う。

「次の行き先は、ぶらり一人旅行で、適当に歩いて見つけたところで良いか」

そう言うと俺はこの薄気味悪い館から出て行き、次の見もしないで場所まで適当に歩いて行った。

親切が突然……、コイツ狸か!! (後書き)

しかし、自分の飛びっぷりに驚きます

主人公設定 (前書き)

要るかと思いついてみました。しかし完全ではありません^^;

主人公設定

名前

八神 流星

能力

『時間制御（逆行）』

メインは時間を戻す事。進めることも出来るが動作が遅い。

『時間と共に喰らう』

時間がある限り力を得て、例え数年鍛えなくとも身体が常に最高の状態へ最適化される。

現在は有り余る力のせいか命の『ストック』が2000回ほどある。しかしこの能力を得る為には最低100年生きなければならぬ。時間があればあるほど力が増える。それがこの能力の強味。最強であるが、能力が『時間』よりのため覚醒するのはごく一部。そしてたいがい100年生きる前に人は死ぬため覚醒した者は居ないとされている。

ついでに命の『ストック』に関しては今でも地味に増えたりしている。

『不老不死（？）』

『時間制御』の副作用。死ぬのと同時に死ぬ前の状態へ逆行してしまふ。能力は、死ぬと自動発動してしまうため本人の意思は関係な

く勝手に蘇ってしまう。
歳は、能力が付いたのと同時に老いなくなった。

『魔術属性・雷光』

雷タイプの魔術と光（？）タイプの魔術が使える。しかし本人は魔術よりも剣術の方が得意である。

『精霊聖装機』

通称『雷光』

約20メートルある大きな兵器である。とある世界に行った際に入手した物で、その世界には上から、最高精霊が守護している『神祖精霊聖装機』、上位の精霊が守護している『新精霊聖装機』、精霊が憑いていない物を『精霊聖装機』と言う、流星の使っているのは『精霊聖装機』は最下級の物である。しかし長年居るせい意識が芽生えはじめている。能力は流星と共有されている。常に流星の持っている亜空間に滞在している、そのため呼べば出て来る。

『北星橋概念奥義』

流星の使う流派。

北星橋の【殺】を習得した人物である。

F A T E風のパラメータ。

筋力	B
敏捷	E X
耐久	C
魔力	E X
幸運	E
宝具	E X

筋力は中々。敏捷に関しては人外中の人外（み、見えないだと……！）。耐久は当たればオーバークル（敏捷が高いため当たるものは大体オーバークルされる。手抜きはカウントされない）。魔力は無限代。幸運は悪運しかない。宝具は『時間制御』の事を指す。

スキル……。

めんどくさい(笑)

主人公設定（後書き）

自己紹介としてはこんなものかと……。

死ぬほど暇だったんでついつい……(前書き)

ネタを注ぎ込んでみた^^

死ぬほど暇だったんでつい……

砂漠を歩く。周りを見渡しても砂、砂、砂。集落らしき物は見つからないし、いい加減飽きてきた。

「一度、ここで埋もれてみるか……」

どう見ても自殺願望者の様にしか見えない事を、流星は言った。

「一か八か、埋もれてみて拾われた人に命運を賭けてみるか……。どうせ暇だし……」

考えたら即行動。それが俺の生き様だ（たぶん）

とりあえず埋もれてみた。

うわゝ、口に砂が入ってジャリジャリしてる、気持ち悪。

俺は我慢しつつも、自分の命運を他人に任せた。

数時間後。

かなり埋もれて、身体の半分が砂に覆われている。

（早くこねえかな）
以外に元気であった。

すると、ラクダに乗ったおじさんが流星に気が付いたのか、こちらを見ている。

「なあ……、アレ人だよな……」

おじさんは流星に近付き、様子を見ていた。

「ちょっと掘り起こしてみましょうぜ」

そう男が言うと、スコップらしき何かを馬車から取り出し、流星を掘り起こした。

「これは……、生きてるな、中々の上物だし、顔も良い、奴隷市場に売れば、馬鹿な婆が高額で買ってくれるんじゃないかねえか」

実は流星、かなりの美形である。

「コイツを回収して『バルスカ』に向かうぞ」

そう言うと男は、流星を担ぎ上げ馬車に放り込んだ。

どうやら俺は砂漠の所で寝てしまい、気が付いたらここに居た。

「じじじじっ」

自分は鎖に繋がれており、腰にあった『紫電』『雷電』が無く、ロボロの服を着せられていた。

周りを見れば野次馬共が俺を商品か何かの様な視線で見ている。

「更に檻って、なんの羞恥プレイ」

俺は動物じゃねえぞ。まあでも人って一様動物か……。

「テメエやつと起きたか……」

声のする方を見ると、怖ーいおじさんが機嫌悪そうにして俺を見ている。

「お前は商品だ、せいぜい良い奴に買われるように頑張るんだな」
それだけ言っておじさんが去って行く。

「まさか……、俺奴隷ですか……」

寝ていたらこれって、普通の人だったら確実に狂うよな。（普通の

人は、興味本意で砂漠で寝ません)

「ま、良いか……」

毎度ながら流れ身でいるし、どうにかなるだる。いざとなったらここを抜け出すだけだし。

さつきからか、変なお兄さんに、熱い視線を向けられているような気がする。

「ウホ！いい男、やらないか」

一瞬にして冷や汗が全身に駆け巡る。

(ヤバイ！掘られる！)

直感的に分かる。コイツ、ゲイだ！

沈黙を肯定と受け取ったのか、俺に熱い視線を向けていたお兄さんが、さつき俺を見ていた、怖ーいおじさんと交渉している。

(ヤ・バ・す・ぎ・る！！)

何か泣きたくなってきた。

「父上これが良いです！！」

声がした方を見れば、10才にも満たない少女と、ガッチリとした体型の男がこちらを見ている。どうやら家族らしい。

「しかし、男か……。クエス、他のでは駄目か？」

父親の方は焦り気味の様だ。

「父上！父上が、自分で決めると、おっしゃったのですから私に決めさせて下さい！」

クエスと言う少女が、凄い剣幕で父親と抗議していた。

すると、あの怖ーいおじさんと交渉を終えたのか、変態がこちらに歩み寄り。

「ホイホイ付いて来て良かったのかい？」

素敵に最悪のこと言ってくれました。

「まさか、アイツに買われるなんて、あんなついてないな……」

さっきの怖ーいおじさんが同情した眼差しでこっちを見ている。

(ぶっ壊すか……)

アッーー！！

なんて言うぐらいだったら、此处を焦土に変えてやる。と俺は内心そう決めた。

「父上！！」

頑張れ少女、俺を買えなかったらここら一帯が無くなるぞ。

「仕方ない……。すまないが、この者を私に譲ってくれないか？」
少女の剣幕に折れたのか、少女の父親が、変態に俺を譲ってくれと頼んでいる。

「良い男は、金では譲れない」

変態が金では俺を渡せないと主張。

それと、さつきから俺が黙っているのは、面白くなりそうだからの一点に尽きる。

やばくなったら逃げるけどな……。

「ならば、ゲームで決着を決めようぞ！」

少女がそう言った。

「ゲーム？」

「そう、ゲームです！」

そう少女が言うと、カードの束を地面にばらまいた。

「私のばらまいたカードは『神経衰弱』と言って、カードをめくるだけで、神経が衰弱していく」

誰だよ！そんな危ない遊び考えたの！遊戯じゃねえだろコレ！

「そして、神経が衰弱しきるまでにジョーカーを探せば勝ち」

倒れた方が負けで、先にジョーカーを当てた方が勝ちってことかい！
それと、色々と字を間違えて無いか？

「私が勝てば、そやつは、私に譲って貰う！」

こちらを少しチラ見し、変態を睨み付ける様な形相をしていた。

「ならば、俺が勝てばそこに居る『良い』男の尻を貰っていく」

熱視線を少女の父親に向けた。

「なっ！！」

父親は突如尻を押さえだし、どこか娘に懇願する様な視線を向けていた。

「良いだろ！その条件乗らせてもらっ！」

哀れ父親。

「では、そつちの先攻どうぞ」

ばらまかれたカードを一枚見つけ、変態は手に取った。

それと、俺の気のせいなのか、人が集まって来ている。見せ物じゃねえぞ。

「では、これを」

浮かび上がるカードには『ジャック』が表示される。

「ウホ！良い男」

変態は男ならなんでも良いようだ。

「では私のターン！」

少女の振りが、遊戯 気味ている気がする。

浮かび上がるカードは『ジョーカー』

おい！一発かよ！絶対イカサマしてるよな。

「私の勝ちだ！」

周りから何故か喝采の音が聞こえる。

良いのかこれ……。

どう見ても、平等じゃないと思うのは、俺だけか？

「さて、貴方はこれから私の所で務めを果たせてもらおうぞ！」

勝負に負けたのか、変態は最後に俺に熱い眼差しを送り、どこか辛そうな表情でどこかに行った。

この少女に買われたので、俺はすぐに檻から出して貰った。

「ああ……、せいぜい務めさせていただきますよ。嬢ちゃん」

どことなくニヒルに笑ってみたら…。

「貴様！！我が娘を侮辱するとは傲慢無礼だ！今すぐその首叩き切る！」

父親の方が激怒していた。

「ちょ！お客様、ここでの殺しはご勘弁を！他の所でやってください」

近くに居た奴隷商売人の人が、今にも暴れそうな少女の父親を拘束している。

「H A ! N A ! S E !」

そう父親の方が叫んでいると、少女が父親の首元に手刀した。

「すまない、父上が暴走したので少し黙らせた」

父親の方は気絶した様で、身動き一つもしない。

「それと、貴方の名前は何んだ？」

「俺の名前は八神流星。嬢ちゃんの名前は何だ」

「私の名前はクエス」シリマム。主人の名前、刻み込んだか？」

「ああ……。刻み込ませてもらった」

「ならば、これからよろしく頼むぞ、八神！」

俺奴隷だよな……。何でこんなに主従関係バリバリなんだ。

「なあ、嬢ちゃん」

俺がそう言つと、嬢ちゃんはムツとした顔をした。

「八神よ、私の事はこれからクエスと呼べ！良いな！」

ロリのくせして、なんつう迫力……。

「了解、クエスお嬢様で良いか？」

「八神、お前私を馬鹿にしていないか？」

全くしていないが。

だってなあ、上下関係あるんだから、これぐらい言わないとな。

「一樣けじめのつもりなんだが、駄目か？」

「意気込み有りの考えならば私は何も言わない、しかし、さっきの八神の言動に、何か含みを感じたのでな」

こっちをジト目で見てくるクエスお嬢様。……感が良いな。

実際は、楽しそうだから言ったのだが、まさか勘繰られるとは……。クエス、……恐ろしい子……。

「では、初めての仕事だ八神。ここに倒れている父上を、馬車のあるところまで運んでもらいたい」

「了解〜」

まさか、初めての仕事が、クエスお嬢様の尻拭いとは思ってなかった。

俺は嫌な顔もせず、倒れている父親を馬車まで運んで行った。

「クエスちゃん、可愛いよ可愛いよ、世界の宝だよ。ハアハア！」

気絶している人物（父親）は、寝言でなんかヤバイ発言している。

なんと言うか……。性犯罪者一歩手前？

さつきから「ハアハア！」しか言わないせいか、体勢の関係状、荒息が首元に掛かって気持ち悪い。

（父親と言うよりも、ロリコンの方が、しっくりくるよな）

などと荒息掛けてくる父親を、そう俺は評価していた。

「クエスお嬢様は、父親のどこが好きなんだ？」

沈黙。怖いぐらいに沈黙が続いた。

「無いな……」

父親様、手塩を掛けてきた愛娘に好かれていないな。

「あえて挙げるなら、衣食住の提供を惜しまない心の広さか……」

いや、普通だろ。

それ。

「なーに、八神の衣食住は、私の方でどうにかするさ」

ふと思うが、何故立場上奴隷の俺がこんなに優遇されるんだ。

「ふつ……、不思議に思っている様だな、理由は簡単さ、家の家系は代々奴隷から世話係を見つけた。それだけさ」

それってつまり、俺はクエスお嬢様の世話係になったという訳か……。

「どんな家系だそりゃ……」

「まあ、良いではないか、見たところかなりの腕だろ、修羅場を幾度も潜り抜けている。そんな眼をしている……。何故ここに居るか不思議だがな」

「……色々だよ」

言えない……、砂漠で寝てたら、気づかぬ間にここに居ましたとは、……言えない……。

「理由がどうあれ、私に買われたんだから忠義を誓って貰うぞ」

「了解」

満面の笑みでクエスは言う。

「八神、これからよろしくな！」

「ああ……。よろしく」

そして、俺こと八神流星は、クエスの所で世話係を勤めることになった。

戦闘開始！！相手は魔導師！！（前書き）

時間をかければなんとやら……。

戦闘開始！！相手は魔導師！！

現在俺は、クエムお嬢様のお屋敷に向かっている最中であり、奴隷として立場のせいか肩身が狭い思いをしている。

あれ？世話係は？とクエスお嬢様に聞いたところ、お屋敷で試験か何かをやって合格すれば、めでたく奴隷から世話係に位が上がるらしい。

俺、読み書きとか出来ないぞ。

だって、まだ来て日が浅いんだぜ。無理だって。

クエスお嬢様に、試験の内容を聞き出そうと話し掛けたら、周りにいる人達に睨まれた。

しかし、めげずクエスお嬢様に話し掛けた。

「なあ、クエスお嬢様」

「ん？なんだ八神」

「試験って具体的になにやるんだ？」

クエスは考えるそぶりをして、顎を手に乗せた。

「そこら辺は、私の管轄外だからなんとも言えないが、父上が試験官をだということは分かるぞ」

「クエスお嬢様の親父って、今絶賛気絶中の野郎だよな？」

俺は隣で、ピクピク痙攣して気絶している人物を指した。

「ああ、そうだ。こんなに今は情けないが、本気だと強いんだぞ」

本当かよ……。

俺はその親父の方を見て溜息をついた。

「娘の手刀一発で、やられる奴が強いとは思わないのだが」

「父上は私に甘いからな」

ええ、そうですね。良く聞こえてくるよアンタの父上の喘ぎ声！

ここまでくると、親子愛じゃないだろと思うんだが。そこんことど
うだろうな。

「私が父上から離れれば、自害しかけないからな」

クエスは、どこか慈悲深い視線を父親へ送った。

ドカーン！！

外の方から、何かが爆発したような音がした。

「敵襲！敵襲！盗賊らしき者達がこちらに向かって魔法を撃ってきています！！」

さらに轟音。馬車は揺れ、クエスが態勢を崩した。

「畜生！魔導師を連れて来てなかったからこんなことになったんだ
！」

乱戦の中一人の男が吐き捨てるかのように言った。

「その馬車止まれ！！」

外から盗賊達が、こちらに呼びかけているようだ。

しかし、こちらの馬車は止まらず、更に馬車の速度を上げた。

しかし、さっかの衝撃のせいか思うように速度が上がらない。

さらに盗賊達は、俺達の馬車に当たらないように牽制しながら魔法を撃ってくる。

「父上起きてください！！」

クエスは父親の身体を揺さ振るが、一向に起きる気配が無い。

「（はぁ……。どうしたもんか……。）」

俺はそんな襲われている中、冷静だ。

「オイ！奴隷、馬車から降りろ！」

クエスお嬢様の護衛をしているであろう人物に蹴り飛ばされ、俺は馬車から転げ落ち。

「八神！」

護衛の人物に蹴り飛ばされたことに気がついたのか、クエスお嬢様が俺の名を呼んだ。

「クエスお嬢様、ちよつくら賊をのめしてきます」

俺はどこか近所に行く様な気持ちで、馬車から落ちた。

「よつと！」

態勢を無理に変え、着地に無事成功した。

「さてと……」

真つ正面には、クエスお嬢様を追いかけて来た盗賊共の馬車がある。

「しかし、『紫電』『雷電』も無し of 戦闘なんて初めてだな」

正面の馬車からは、魔導師達がこちらに向けて魔法を撃った。

「残念」

その魔法は、俺に当たることもなく霧散した。

その光景に驚いたのか、魔導師達の攻撃は、更に激しくなってきた。

しかし、その全ては俺の目の前で霧散しダメージらしきダメージも与えられなかった。

「刀無しってことは、純粋な体術か、魔術、どっちかだな」

別に、刀達（『紫電』、『雷電』）を呼び出すことも出来るが、神経を繋げるのめんどくさい。だからって体術じゃなく、という訳で、魔術で倒す事にした。

「敵見必殺！サーチ&デストロイ！」

俺の出来る魔術の特製は『光』と『雷』。片手に雷を纏わせて後は飛ばす技、ライティング・シュート通称実に安直だと俺は思う。

閃光。雷を纏ったなにかが、閃光の如く敵に向かって進んでいく。そして衝突。この間に行われたは一瞬、まさに閃光。

衝突した盗賊達の馬車は、俺の《ライティング・シュート》によって燃え尽きてしまった。

「ああ、あく。殺っちまったよ」

元馬車だった物を見て思った。

「絶対生きてないよな……」

念の為、燃えカスになってしまった馬車に近付いた。

「こりゃひどい」

馬車の材料になっていた金属を見た。完全に溶けていた。

「しこ傷様。さて……」

気配を探ってみると、クエスお嬢様は上手く逃げられたようだ。

更に探ると、盗賊達の馬車が、こちらに近づいて来ていることが分かる。

「まだ在たんかよ。……めんど……」

クエスお嬢様の馬車は、速度が落ちてるし、このままではいずれ追いつかれるよな……。

「はあ……」

思わず溜息が出てしまった。

「数三十か……」

盗賊としては、数が多いのか少ないのか微妙な数字だ。

「メガトン級が居れば別たがな」

数より質じゃないと俺には勝てないし、対多数は得意なんだよな俺。

「まあどうでも良いや……。貴様ら断罪無償で処す」

パチン！

指を鳴らす。宙には魔力で出来た雷の塊が浮いていた。

「その輝き、一点の曇りも無しに……」

雷の塊からは超高流電圧の光が放出され、盗賊達の方へ向かって行った。

刹那、轟音。

光が向かった先から轟音が鳴り響き、生暖かい風が頬を過ぎる。

「数は零。殲滅完了ってね」

さて、盗賊達を仕留めたことだし、クエスお嬢様の馬車の後を着けて、屋敷に行きますか。

そうと決まれば、クエスお嬢様の気配を探り、辿って行くことにした。

「と、その前に……。『紫電』と『雷電』を呼び戻しとくか」

ライン形成、『紫電』のラインと同化。
ライン形成、『雷電』のラインと同化。

武器は本来あるべき所有者に渡される。

「来い！『紫電』、『雷電』！」

俺は愛武器を呼び、本来在るべき場所に収まった。

「お帰りの『紫電』、『雷電』」

『紫電』を右腰に挿し、『雷電』を左腰に挿した。

「じめんな『雷電』、この頃使つてやれなくつて」

流星の使う刀『紫電』、『雷電』は、昔から使う愛刀であり、これまで一緒に苦楽を共にしてきた相棒である。

しかし、武器は使われてこそ意味があり、ただの飾りなんて冒涇ではない。長年刀を握ってきた流星には、それが感覚的に解っていた。

「だって、お前を使える相手、居ないんだもん」

流星の流派の戦型は、基本両手持ちによる『紫電』の剣術。

そして、流派でも亜種に入る『紫電』、『雷電』による二刀流。

双方を使い分けている流星は異常だった。

本来、神を護る為の流派だったのにも関わらず、流星は二刀流を用いて本来あるべき『北星橋概念奥義』とは違う型を習得した。

何かを護る為の『北星橋概念奥義』ではなく、殺す事に躊躇しなくなる。つまり、暗殺術亜種。こう流星は呼んでいる。

二刀流になると本気の殺し合いになる。その為、本気で戦える相手が現れるまで、二刀流は使わない。

そのせいか、必然的に『雷電』の使用頻度が減ってしまうのだ。

「さて、行きますか」

俺はそう言つとクエスお嬢様の気配を辿り、歩きだした。

「家来は主の為にとってね」

言いたいことだけ言つてみた。

戦闘開始！！相手は魔導師！！（後書き）

主人公はなんとなく。くお嬢様と呼んでいるだけであり、あまり忠誠を誓っていないかったりしています。

初めての別視点wあゝい

<クエス 視点>

私の世話係になっていたかもしれない八神流星が、私の乗っていた馬車から転落して二日が経った。

何故私が奴隷の中から八神を選んだかということ、奴を見た瞬間、私の中で何かが芽生えたからだ。

その感覚の赴くまま、私はコイツを世話係に任命しようと思った。

あの時、あの場所で八神を見た時、私の中で芽生えたものは何か今でも分からない。

しかし、一つだけ分かることがある。

「アイツの事が心配だ……」

この一言だけは、しっかりと私の中で漂い続けている。

コンコン。

私が考えていると、私の部屋のドアからノック音が聞こえる。

どうせ、ゼバスチャンだろう。

「お嬢様、入ります」

入って来たのは、私の予想通り今現役、後引退のセバスチャンだった。

「セバス何か用か？」

私はセバスチャンに視線を合わせることなく、窓から空を眺めていた。

「お嬢様、本日はシリマム家代々から行われて来た、選別日でございます」

八神を除いて、家臣たちが選別してきた六人の奴隷が、私の世話係の試験を受ける日だ。

なんとというか私はこの日は鬱だ。

受かった者は私の所で働き、裕福に暮らせるだろう。だが、受からなかった者は、奴隷に戻ってまた売られるだろう、だが中には奴隷ではなく意図的に仕組まれ、私の世話係になる者も居るだろう。

受からなかった奴隷達の末路を考えると、鬱になりそうになる。

「セバス…、私の選んだ八神は、選別に含まれていないのか？」

「いえ、残念ながら八神様は、含まれておりません」

あれから二日、盗賊達との乱戦の中落ちていった八神。

もう、生きている可能性は低い。運が良ければまた奴隷市場に居る

だろうと思いい、出掛けようとしたら父上に止められた。

どうやら父上は、八神の事が何故か嫌いらしい。

そんな理由で……。と言ったら父上に「盗賊が現れクエスを襲った、つまり我が財産を狙った犯行であることの可能性が高い。さらに賊共から逃げて来たと言うことは近くに潜伏しているかもしれないから駄目だ」と最もらしい事を言われた。

その為、外には出られず、私は選別の日を迎えてしまった。

「仕方ないか……。その選別何時に行うんだ？」

「今日の二十一時でございます」

何故そんな夜中にやるのか、不思議に思ったが、八神の事を考えるとどうでも良くなってきた。

「私も試験を見たいのだが良いか？」

「試験に関しては、主様に伺ななければいけないので、私の一存では決められません。すみません、お嬢様」

「セバス、お前が謝ることじゃないだろ。後で私が父上に聞いてみる。勝手に決められるのは何か癪だからな」

そう言うと私は、足を屋敷のただ広い庭に向け歩きだした。

「本日は、何時頃にお帰りになりますか？」

職柄このセバスチャンはよく、私の行動を聞いてくる。

「選別前には帰ってくる」

そう言い残し、私はドアに手を掛け、屋敷の廊下に出た。

「ついでだから、父上に選別に関して聞いてくるか」

私は花壇に行く前に、父上の方に行くことにした。

廊下を歩いていると、いつも通り、メイド達が私に挨拶をしてくる。もう見慣れた光景なので特に何も思わない。

しばらく歩いていると、父上の部屋のドアの目の前に立っていた。

ノックをすると、中から父上が笑顔で迎えた。

「ん？どうしたんだクエス？」

普段は普通なのに、私関係になつてくると人が変わるから困った人だ。

「父上に話があつて来ました」

「そうか、ここで立ち話もなんだから中で聞く」

私は父の後に続き、ソファに腰掛けた。

「で？クエス、話はなんだ？」

「選別のことでお話があるのですが……」

私はその話を切り出すと、父上の表情が曇り掛かる。

「まだ、あの男の事気にしてるのか？」

父上の声のトーンは下がり、低い声で私に聞いてきた。

「気にしてないと言えば嘘になりますが、私の用は、選別に私も参加したいと、意思を伝えに来たからです」

「なるほど……。まあ、良いか、クエスお前の参加を許可する」

「ありがとうございます！」

そう言うと、私は速攻で父上の部屋から出た。

「もっとゆっくりしていけば良いのにな……」

虚空の中一人呟いた。

今私は、花壇にあるコスモスに水をあげている。

「やはり、封鎖された空間よりも、外に少しでも出て、コスモスの生命力を感じた方が元気が出るな」

私は花が好きだ。コスモスは、花の中でも一番好きで、私の部屋によく飾ってある。

「さて、素振りでもやってるか」

実は私、自衛の為少しでも強くなろうと、家族にも秘密で剣術の練習をしている。剣術の練習と言っても素振りをするだけなので、大して強くもなんと無い。

一度団長に稽古を付けて貰い怪我をしてしまった時、私の父上が団長を半殺しにしたのを、今でも鮮明に覚えている。

その為か、あまり人には頼れなくなってしまった。

居たとしたら、父上を超える力を持っているか、父上に認めさせるかになる。

私は、一心不乱に木刀で素振りをしていく。

私はいずれ一人でも戦える様になりたかった。

護られてばかりでは、自分が情けなく感じてしまっからだ。

私は生れつき、魔法が使えない。父上は、魔法も剣技も使えていくらか有名だが、その娘が魔法を父上と同じくらい使えるという保証は、どこにもない。

才能というものは、努力で賄えると思っていた私は、魔法という突発的な才能の持ち主しか得られない力が、あまり好きではない。

腕に力を籠める。

気持ちいい汗が流れ、清々しい気分になる。

ガサ！！

どこからか物音がする。

その物音から出て来たのは、黒染の格好をした者達だった。

纏っているものが普通の人達とは違っていた。
そこにあるのは、私に向けられた殺意のみ。

「何者だ！」

そう私が言つと、頭らしき者が前に出て来た。

「我々は、貴方達を襲った奴らと少し利害関係を結んでいるものです」

どうやらコイツら、私の馬車を襲った盗賊と知り合いらしい。

奴らの纏う殺意に、私は精神を削りながらも強気でいた。

「それで何か用か？用が無いならさっさと帰ってもらいたいのだが」
右手にある木造の剣を、無意識に私は強く握っていた。

「用はありますよ、我々の聞きたいことは、『誰』があの数を倒したのか、気になりますよ、その時の当事者に話を伺いたく来ました」

口調は丁寧だが、奥底では腹黒いこと考えそうな奴だと私は思う。

しかし……。

「倒した？あの盗賊もどき、誰かにやられたのか？」

私はてつきり追って来ないものだから、振り切ったと思っていたのだが、違ったか。

今思えばおかしいことだよな。

あそこまで追ってきたのなら逃がすはずないからな。

成る程、誰かが盗賊もどきを撃退してくれたのか、しかし一体誰が？

一瞬、八神のことを思い出したが、すぐにその考えを捨てた。

そんなはずないよな。

「おや？知らないのですか？」

「こつちから、教えてもらいたいぐらいだ」

ジリジリとアイツらが私に近付いてくる。

「残念でした、私の友の弔いが出来るかと思ったのですが……。仕方ありません……」

何かの重圧が、私を襲う。

身体は動かさず、ゆいつの武器である、木造の剣は手から滑り落ちてしまった。

口は上手く動かさず、喋りたくても喋れなくなってしまった。

「（ちっっ！！魔導師だったか）」

しかし、何故魔導師が私の屋敷に入れたのか不思議だ。

対魔導師用の結界が屋敷全体を覆っているはずだ、何故侵入を許した。

「不思議そうにしていますね、でも教えません。貴方はこれから死ぬのですから」

絶対絶命。頭の手には暗器が握られており、それが私の命を奪うであろうことが分かった。

私は声も出せず身体も動かさず、涙が頬を伝った。

「（短い人生だった。意外に死ぬ時って冷静なんだな私……）」

瞳を閉じてふと、八神の笑い顔を思い出した。

「（もう一度ぐらい、逢いたかったな……）」

そして、私は気付いた時には死んでいるのだろう。

しかし、何時までたっても私は死なない。

「（どうしたんだ……）」

瞳を開くとそこには……。

「無念とか後悔とかただ漏れだつたぜ、クエスお嬢様」

魔導師達全員が地に付し、そこには笑いながら私の髪を撫でる八神がいた。

「八神！！」

私は八神に抱き着いた。いつもならプライドやら父上のe t c……。などでしてなかったのだが、今はそんなことどうでも良くなつてきた。

「今更報告だが、俺達を追ってきた盗賊共全員、撃退しておいたぜ」

アイツらの言っていた人物って、八神だったのか……。

「お帰り八神！！」

「ただいま？」

何故疑問形になる。

「色々、聞かせて貰うからな」

「了解」

八神はめんどくさそうに頭を掻いた。

それよりもなんだろう、この温かい気持ちは……。

私は八神の手を取り、私の部屋に向かって歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563/>

神殺しの行く末

2010年10月11日22時39分発行